

保育士の陰性感情に対する対処行動の過程についての質的研究

保坂 芳子・山口 一

桜美林大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

A Qualitative Study of the Process of Coping Behaviors for Negative Feelings of Nursery Teachers

Yoshiko HOSAKA · Hajime YAMAGUCHI

J.F.Oberlin University, Graduate School of Psychology, Department of Clinical Psychology

キーワード：保育士，陰性感情，対処行動

抄録：全国保育士会の倫理綱領によると，保育士には専門性や人間性の向上が求められている。保育士は子どもとの生活で，陰性感情を含めた様々な感情が湧いてくるが，それに対処しながら専門性と人間性を高めていくと考えられる。本研究は，保育士の子どもに対する陰性感情とそれに対する対処行動の変化の過程を明らかにすることで，保育士の専門性と人間性はどのように形作られるのかを明らかにすることを目的として行われた。調査対象者は10年以上の経験を持つ女性保育士13名である。半構造化面接により1人に対して約1時間程度の面接を1回実施しM-GTAによる分析を行った。結果として43の概念が抽出され，11のサブカテゴリー，4のカテゴリーに分類された。4つのカテゴリーは，《園の日常生活》(サブカテゴリー【予想外の行動】，【保育士の力量】，【子どもを取り巻く環境】)，《経験の積み重ね》(サブカテゴリー【即時的行動】，【他者の反応】，【感情の調整】，【冷静な行動】)，《知恵の蓄積》(サブカテゴリー【行動が予測できる】，【気力が戻る】)，《経験の統合と自信》(サブカテゴリー【ターニングポイント】，【人としての成長】)の順に進展し，それらが循環しながら繰り返されることによって，徐々に自分の感情をコントロールできるように変化していった。長い時間経過を経ながら対処行動は積み重ねられ，専門性や人間性が向上し成長していった。また，1人の人として成長する子どもの傍らにいる喜びが語られ，それを支える職業であることが改めて示された。以上，本研究により，経験を重ねながら，子どもと共に成長し続ける保育士像が浮かび上がった。本研究が，保育士のあり方を模索している若い人の保育士としての展望を持つ契機になることを期待する。

I はじめに

1. 問題提起

保育士は子どもの保育，保護者の支援，地域社会の子育て支援など社会的変化により多様な対応が求められている。全国保育士会の倫理綱領（柏女監修 2009）には，保育士に求められるものとして，自らの専門性と人間性の向上の2要因をあげている。専門性について，岸井（2000）は「子どもの発達理解，カウンセリングマインド，発達に即した指導計画を立て環境を通して実践する」と述べている。人間性について，島田（2009）は「簡単に身に付くことではない。これは保育者の過去の生活経験が反映される。保育の場面でも，子どもが保育士の思いと異なった行為を見せても許容するといった忍耐を重ねることにより保育者自身の人間性を高めることにつながる。そのことによって子どもとの関係がより深いところでつながっていく」と述べている。

このように，保育士は成長過程にある子どもに対する対人援助職であることから専門性や人間性が求められる。保育士の専門性や人間性が語られる際には，保育士も感情がある人として生活していることを前提として考える必要がある。感情について，木曾（2012）は「保育士は子どもに対して困り感を持ってはいけなく，困り感を言っははいけなくという意識があり，その結果保育士は罪障感を抱く」としている。保育士は子どもとの関わり子ども同士の関わりを見る中で，陽性感情や陰性感情が湧いてくることを想定して，どのように安定した保育の場を作るかということを考える必要がある。倫理綱領に記されている豊かな愛情ある保育の場は，努力し失敗を重ねながら様々な感情体験を基に子どもと共に作り上げていくものと捉えることができる。

保育士が日常生活のストレスや陰性感情を自覚することは自己理解をもたらし，他の保育士との相互関係を向上させ，子ども理解に繋がっていくと考えられる。これまであまり焦点が当てられていなかった保育士の子どもの対する陰性感情やそれに対する対処行動を明らかにすることは，経験の浅い保育士が子どもへの適応的な対処行動を身に付けながら子どもに対する理解を深め，今後の保育士としてのあり方を考える契機となると考えられる。さらに，経験を重ねた保育士が経験の浅い保育士を支援するための視点を得ることができると考えられる。

2. 保育士の専門性としての陰性感情のコントロール

保育士は，子どもの世界をいかに感じ取るかということが資質のひとつとして求められている。また，保育士は子どもと向き合う一人の人間としての姿勢が求められる。成長過程にある子どもに関わる対人援助職であり，子どもの言葉にならない気持ちを感じ取り理解する感性が問われることになる。神谷ら（2011）の「保育者の感情労働と職業的キャリア」に関する研究では，「保育士の専門性として求められていた明るさ，優しさ，愛情は保育士にとっては自らの情動制御に関わる問題」と述べ，感情労働という視点から感情コントロールの重要性を挙げている。具体的にはどのような陰性感情が湧き起こるのかについて，同研究では感情演技尺度の“子どもに対する否定的な感情の隠蔽”因子の項目で，イライラしている，疲れている，

怒っている、不安な気持ちを挙げている。藤井（2005）の「小学校教師の怒り経験に関する探索的研究」では、「児童の言動」因子の項目で、怒鳴りたくなる、むかむかする、腹が立つ、カッとなる、イライラするなどの項目を挙げている。これらの項目は保育士にも通じる陰性感情であると考えられる。

本研究で取り上げる保育士の陰性感情は、保育中に子どもと関わる中で起こるものとし、例えば、一斉指導やスケジュールの中断、子どもが社会的規範を破る、生活のルールを守れない、暴力、喧嘩、いじめ、生活習慣が身に付かないなどが原因として湧き起こると考えられる。このような状況で起こる陰性感情のコントロールについて、諏訪ら（2012）は「保育者が子どもの遊びの状況を見出し、感情を表出したり抑圧したりしながら遊びを支える営みを保育士の専門性として捉えられる」と述べ、感情コントロールを保育士の専門性として挙げている。新任の保育士については、諏訪ら（2012）は「幼児の状態をコントロールしようと躍起になり自分の感情状態をコントロールできなくなる。そのような感情を幼児にぶつけたことにより罪悪感を感じて、一層自信をなくすようである」と述べている。さらに、高濱（2001）は「保育上の問題解決には、文脈と結びついた手がかりやこつが使われ、またその手がかりやこつは幼児の個人差や発達の变化により変動すると思われる」と述べている。つまり、保育士は個人に合わせた柔軟で相互の関係での対応が必要であり、感情のコントロールもまた経験を積みながら学んでいくものとして考えられる。いかに感情のコントロールを行うかは、保育士の専門性のひとつとして捉えることができる。

3. 保育士のストレス対処行動

保育士はストレスに対してどのような対処行動を用いているのか、先行研究をまとめると、植田（2002）は「保育士の全般的傾向として、積極的対処や消極的対処よりも友人や同僚などに援助を求める支援利用コーピングを使用することが少ない」とし保育士の援助希求コーピングの重要性を指摘している。斎藤ら（2009）は、保育従事者について「健康群はバーンアウト傾向群に比べ困難な問題に向き合う“挑戦”という問題コーピングや積極的に気分転換をしようとする“気晴らし”といった情動中心コーピングを多く用いていることがわかった」としている。宮下（2010）は「保育士のバーンアウトを防ぐには、問題について再度見直してみたり、工夫したり、過去の経験から考えてみたり、あるいはくよくよしないようにするなど、問題と正面から向き合い、解決することが一番良い方法だと考えられる」としている。さらに斎藤ら（2009）は「経験を積み重ね知識や技術を身に付けることが保育士としての自信や効力感が高まり、そのことがメンタルヘルスに寄与する」とし自己効力感とメンタルヘルスの関係を述べている。以上の問題提起を踏まえて本研究では、保育士の子どもに対する陰性感情の対処行動とその成長のプロセスを明らかにする。

Ⅱ 研究目的

本研究は、保育士の仕事に慣れ自分を振り返ることができると考えられる経験10年以上の保育士にインタビューし、保育士の子どもに対する陰性感情とそれに対する対処行動の変化の過程を明らかにすることで、保育士の専門性と人間性はどのように形作られるのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ 方法

1. 調査対象者

調査対象者は、国内在住の10年以上の経験がある女性保育士（正職員また正職員経験者）である。機縁法により研究者の知人の保育士と知人の紹介による保育士を抽出した。

10年以上の経験を重ねてきた保育士を対象とした理由は、経験による変化を見るためである。さらに、保育士の仕事を俯瞰してみることが可能であり、ストレスとなる自分の感情についても時間を経ていることから、冷静に語る事が可能と考えたからである。女性保育士とした理由は、乳幼児期の子どもに対する母性的関わりと自らが母親になる可能性などから、対処行動には性別による違いがあると考えたためである。また、保育園はこれまで長い間女性の職場であったことから、10年以上の男性保育士はごく少数であり、十分な検討を行うことは困難であると考えたためである。

2. 調査方法

抽出した保育士に対して、半構造化面接により1人に対して約1時間程度の面接を1回実施した。許可を得て録音後、逐語記録を作成しM-GTA（木下，2011）による分析を行った。

インタビューには以下のインタビューガイドを用いた。

- 1) 子どもに対して陰性感情が湧いた出来事はいつ頃のことか。
- 2) どのような感情だったか。
- 3) その出来事はどのような状況で起こったか。
- 4) その時に感じたことは何か。
- 5) どのような対処行動を取ったか。
- 6) 行動した結果どのようになったか。
- 7) 感情は変化したか。
- 8) 問題は解決したか。

また、分析テーマは、『子どもと関わる中で起こる保育士の陰性感情のコントロールとその成長のプロセス』とした。なお、陰性感情の定義は、松浦（2010）を参考にして、『保育士が子どもに抱く、怒り、いらだち、困惑などの否定的感情』とした。

IV 結果

1. 分析対象者

13名の女性保育士にインタビューを行った。年代別では、30代2名、40代6名、50代5名で、平均年齢は、47.3歳 (SD 6.97)、平均経験年数は18.5年 (SD 8.01)であった。全員が2～5か所の保育園勤務を経験し、現在も正規保育士またはパート保育士として民間の認可保育園に勤務している。その内、公立の保育園勤務経験者は4名であった。

2. 概念、サブカテゴリー、カテゴリーについて

43の概念は、11のサブカテゴリー、4のカテゴリーに分類された。

(1) カテゴリー《園の日常生活》(表1)について

このカテゴリーは、保育園の日常生活で陰性感情が喚起される要因である。3つのサブカテゴリーは、相互に関係しあって陰性感情に影響を与えている。

表1. カテゴリー《園の日常生活》

サブカテゴリー	概念	具体例
予想外の行動	乱暴なことをする	他の子に危害を加える, 怪我をさせる
	言うことを聞かない	禁止されていることをする, 何度注意しても止めない
	反抗的態度をとる	生意気なことを言う, 揚げ足を取る, ウソをつく
	集団行動ができない	勝手なことをして集団に入らない, 指示を聞いていない
保育士の力量	子どもがわからない	何故泣いているのか分からない, 発達段階やその子の特性が分からない
	時間の管理ができない	余裕がない, 流れに乗せるために焦らせた
	クラスがまとまらない	指導が上手くできない, 怒鳴って収めようとした
	子どもにあたる	なんで怒ったのか分からない, 体調によりイライラした
子どもを取り巻く環境	保護者のことで神経質になる	また言われぬように気を遣う, 分かり合えなくて悩む
	園のやり方に悩む	園の方針に疑問を持つ, 目標のために無理をさせた
	頼れない	助けてと言えなかった, 自分の仕事だけで精一杯
	陰性感情	カッとする, イライラする, ムッとする, 悲しい, どうしよう, ダメだ

(2) カテゴリー《経験の積み重ね》(表2)について

このカテゴリーは、陰性感情が引き起こす行動や感情に関するカテゴリーである。経験の浅い時と経験を重ねてからの対象行動には相違がある。他者の反応は感情の調整に促進的に影響している。

表 2. カテゴリー《経験の積み重ね》

サブカテゴリー	概念	具体例
即時的行動	すぐに怒鳴る	すぐに怒鳴った, 自分が抑えられない
	大声で止める	危険な行動を止めた, 「ダメでしょう, 止めなさい」
	威圧的に言う	言うことを聞かせようとした, 先生らしく見せた
	落ち込む	何日も引きずった, これはダメだった
感情の調整	落ち着く	落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせた, 淡々と言うように努力した
	言葉を飲み込む	言葉を飲み込んで我慢した, 冷静になって言い直した
	はっとして我に返る	何しているんだろう, びっくりした
	受け流す	ハイハイ分った, 適当にあしらった
	考えない	突き詰めて考えたくない, 違うことを考えて逃避した
他者の反応	対象児の反応	泣かしちゃった, さらにひどく暴れた
	周りの人の反応	他者の目があるから抑えた, 複数だから理性が働いた
冷静な行動	静かに言い聞かす	静かに言ったほうが分かる, ひと呼吸おいてから言う
	教えながら待つ	子どもは待てば返ってくる, 真剣な姿勢で伝えて待つ
	他の人に代わる	冷静な先生に任せた, 皆で協力して関わった

(3) カテゴリー《知恵の蓄積》(表 3) について

このカテゴリーは, 経験の積み重ねの結果, 起こる反応である。様々な経験が積み重なり対処に余裕が出てくる。2つのサブカテゴリーは, 相互に影響し合って経験の統合と自信へと繋がっている。

表 3. カテゴリー《知識の蓄積》

サブカテゴリー	概念	具体例
行動が予測できる	個の発達を理解する	一人一人違うことが分かった, 先が見えた
	引き出しが増える	試したことが身になった, 応用がきくようになった
	反省する	自分の理解が未熟だった, 追い詰めたら駄目
	勉強する	関わり方が分かった, 気づいていないことがあった
気力が戻る	話を聞いてもらう	イライラ感を聞いてもらう, 同期の人に吐き出す
	笑顔に癒される	可愛らしいところに癒された, 笑顔に癒された
	成長に感動する	成長していく実感, 子どもと一緒に成長できた
	気分転換をする	身体を動かして発散した, 趣味に没頭
	上司の支え	自分を受け入れてもらえた, 言葉に救われた

(4) カテゴリー《経験の統合と自信》(表4)について

このカテゴリーは、保育士の経験と個人的な経験が統合され、人として成長する過程である。2つのサブカテゴリーは保育士としての生活や保育観に相互に影響を与えていた。

表4. カテゴリー《経験の統合と自信》

サブカテゴリー	概念	具体例
ターニングポイント	ある子どもとの出会い	その子の行動が理解できた、自然に感情が収まった
	自分の子どもを持つ	視点が変わった、できない部分も受け止められた
	他の職業から学ぶ	出来るところを見ていなかった、俯瞰して保育をみた
人としての成長	怒らなくなる	怒り方が変わってきた、気づくことで余裕ができた
	子どもに育てられる	子どもがいたから踏ん張れた、成長させてもらった
	経験が自分の中に落ちる	経験と学んだことがひとつになって納得した、学ぶ気持ちと学ぶ事があって自分の中に落ちた
	価値観が変わる	俯瞰して見るようになった、皆同じは無理があった
	母性が育つ	預かるのは親の代わり、子どもたちと育てた関係性

3. 結果図とストーリーライン

(1) 結果図

以上の43の概念、11のサブカテゴリー、4のカテゴリーは図1の結果図としてまとまった。図中、概念は〈 〉、サブカテゴリーは【 】、カテゴリーは、《 》で表した。太字矢印は促進、格子矢印は経験の浅い時、双方向矢印は相互関係を表す。

(2) ストーリーライン

保育士の子どもに対する陰性感情は、【予想外の行動】のサブカテゴリーから湧きあがっていた。【保育士の力量】、【子どもを取り巻く環境】、【予想外の行動】は《園の日常生活の》カテゴリーの中で相互に影響しあっていることが明らかとなった。陰性感情は《経験の積み重ね》へと向かった。

〈陰性感情〉は、経験が浅い保育士は【即時的行動】のサブカテゴリーへと向かった。また一方で、経験を重ねると陰性感情は【感情の調整】のサブカテゴリーへと向かった。これらは【他者の反応】のサブカテゴリーから影響を受けていた。【即時的行動】は【他者の反応】に影響を受けて【感情の調整】へと向った。また【他者の反応】は【感情の調整】のサブカテゴリーへ促進的に影響していた。【感情の調整】は【冷静な行動】のサブカテゴリーへと向かった。

これらの陰性感情の対処行動は《経験の積み重ね》のカテゴリーの中で行われ、【行動が予測できる】のサブカテゴリーへと向かった。【気力が戻る】のサブカテゴリーと【行動が予測できる】は、相互的に影響しあって、知識や技術と経験が結びついて知恵となり《知恵の蓄積》のカテゴリーとなった。このカテゴリーは《経験の統合と自信》へと向かった。

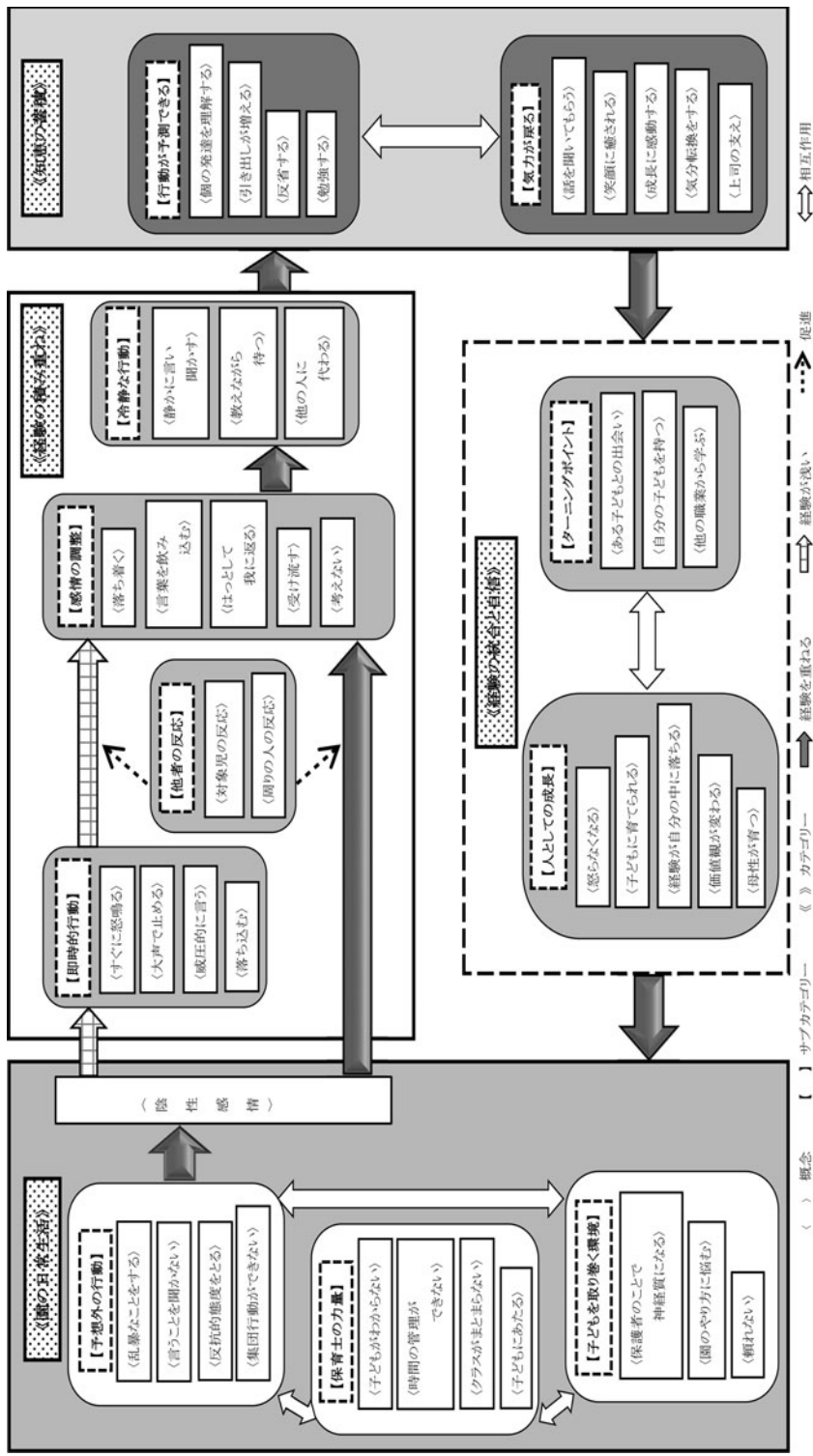


図1. 保育士の陰性感情対処過程の結果図

【ターニングポイント】のサブカテゴリーと【人としての成長】のサブカテゴリーは相互的に関わり合っ《経験の統合と自信》のカテゴリーが形成された。このプロセスを通じて、保育士は個人の生活や保育園でのさまざまな経験を統合し自信を得ていった。その上で園の日常生活に戻り子どもの予想外の行動から起こる陰性感情へ向かった。また、この《経験の統合と自信》へのプロセスを経ることによって、【即時的行動】を減らし【感情の調整】を促進し【冷静な行動】を優先して用いるようになった。これらは、多くの子どもと関わる中で循環して起こり、さら変化していくものと考えられた。以上のプロセスは、経験を重ねなお子どもと共に成長し続ける保育士像として結実した。

V. 考察

本研究は、子どもとの関わりの中で起こる保育士の陰性感情についての対処行動とその成長の過程について調査したものである。津守(2007)は、「予想もしなかった新学期の混乱に直面して、あらためて子どもの側に立つ覚悟を決める。また同僚や親たちと共に子どもを育てる生活をつくることに保育の新たな意味を見出す。いずれも、変化に直面して、新たな状況にある自分を受け入れ、より広い視野に立って、新たな自分を形成する行為である」と述べている。この文章は保育士が、日常的な子どもとの関係性の中で変化に対応していくこと、また新しい子どもや環境に出会う中で、変化を受け入れていくことを述べたものである。これは子どもと関わる保育士の独自性のひとつとして捉えることができる。本研究では、こうした経験による保育士の変化は保育士の専門性と人間性の成長過程として捉えることができた。

以下各カテゴリーごとに考察を行う。

1. 《園の日常生活》

(1) 陰性感情

陰性感情が喚起される子どもの行動については、乱暴な子どもが多く取り上げられ、特に他児に怪我をさせる行動については、瞬間的に感情が喚起され同時に行動していることが語られた。これは、保育士が最も気を遣う事柄であった。陰性感情として、カッとする、イライラする、ムッとする、悲しい、どうしよう、ダメだなどが明らかになった。保育士は、優しく、明るく子どもに接しているというステレオタイプの作られた陽性感情だけでなく、人として子どもに接し、怒り、苛立ち、困惑などの陰性感情が喚起されていることが明らかとなった。陰性感情では、どうしよう、ダメだなどの困惑や自責の感情も語られた。保育士は、子どもに対して感情の調整が行われずに即時的行動をとってしまったことを、自分の力不足として受け止めていた。また、他の保育士や子どもの反応もあり後悔や反省が語られていた。保育士の陰性感情は否定的に受けとめられ、これらのことから、落ち込む、反省するなどへ向かうと考えられた。

(2) 陰性感情に関連する【保育士の力量】ならびに【子どもを取り巻く環境】

本研究では、保育士は、自分自身の技術や子どもを理解する力など、また園のやり方、保護者との関係にストレス源があり、それが陰性感情に影響していることが明らかとなった。森本

ら（2013）は早期離職に関する調査で、「身体的・精神的な不調や進路変更に至った原因は、『責任の重さ』『知識能力不足』『職場の人間関係』」であるとし、職場安定を困難にしている理由として、「『卒業時と現場で求める実践能力のギャップ』と『現代の若者の精神的な未熟さ』」であると述べている。また、高濱（2001）は「幼児や指導についての知識が一定の量になるのは、5年前後の経験が必要とされる」と述べている。本調査でも、経験が浅い頃は、子どものことがわからない、クラスがまとまらない、時間がない、園のやり方に悩むことが語られ、クラスを担任する即戦力が求められることからの責任の重さと知識・能力不足を実感していたことが明らかとなった。

植田（2002）は「どこまでやればよいかわからない、勝手がわからないなど、職務が『曖昧』だと思っているほど、『情緒的消耗感』『達成感後退』『脱人格化』のいずれのバーンアウト度も高くなることが示された」と述べている。また、バーンアウトは養護と教育を基本に生活する中で仕事量の多さや煩雑さが要因になっていることが述べられている。本調査でも、経験が浅い頃を振り返って語ってもらう中で責任の重さや能力不足などが語られていた。さらに、植田（2002）は、保育士のバーンアウトについて「『達成感後退』度が最も高く、次いで職務に対する精神的疲労感ややめたいと感じる『情緒的消耗』度であり、そして同僚や子どもたちとの接触の回避や仕事に意義を感じなくなる『脱人格化』度が最も低い」と述べている。また、「『脱人格化』の平均値が低かったことは、保育職が幼児期の子どもたちを対象とする魅力ある職であることを示すものと言える」と述べている。このことを、介護職のバーンアウトと比較すると、藤原ら（2008）は「介護職を辞めたいと思っている群で、『情緒的消耗感』『脱人格化』の得点は有意に高く、『個人的達成感』得点は有意に低くなっている」と述べている。「『脱人格化』とは人間性を欠くような感情や行動であり、利用者と距離をおく姿勢」としている。本調査で、子どもに癒される、子どもに育てられた、辞めたいと思ったときに子どもに支えられたなどが語られたことから、保育士はバーンアウト傾向にあっても子どもとの接触を回避する脱人格化は低いことが示された。これは子どもと関わる保育士の独自性であると捉えられた。

2. 《経験の積み重ね》

（1）保育士の経験による陰性感情とそれに対する対処行動の変化

大宮（2013）は「保育の質は、保育者と子どもとの関係の質を中心とした日常的な人間関係や、保育者の子どもへの働きかけの繰り返しそのものの中にある」と人間関係の質と日常生活の積み重ねの重要性を述べている。本研究では、保育士の陰性感情の対処行動の変化は、経験が浅い頃には即時的行動をとりやすく、感情的に行動していることが語られた。その後、経験を積み重ねることで次第に、感情の調整が行われ、冷静な行動を取るようになっていた。津守（2007）は「子どもの内なる課題に気づき、それに応えて行為するとき、大人と子どもの関係は創造的に変化し始める」と述べている。本研究では、即時的行動について、予想外の子どもの行動に陰性感情が喚起され、思わず怒りや苛立ちの言葉を発してしまったことで、大人と子どもの関係は非創造的なものになっていることを実感していた。さらに、集団生活をしている

ため、多くの子どもや他の保育士の反応が起こり、これらは、即時的行動や感情の調整に促進的に働くことも明らかとなった。保育士は、反抗的態度や集団で騒ぐなどの対象児の反応で、陰性感情がさらに喚起されたことが語られた。一方で、他の子どもや他の保育士の反応を感じ取り、落ち着きや冷静さを取り戻すようになったことも語られた。このことから、他者の反応は感情をさらに喚起させる要因ともなるが、感情のコントロールに促進的な役割を果たす場合もあることが明らかとなった。

(2) コーピング

加藤 (2014) のいう、ネガティブ関係コーピング、ポジティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの視点に立つと、本研究の即時的行動はネガティブ関係コーピングであり、感情の調整はポジティブ関係コーピングであるといえる。そして、Lazarus & Folkman (1991, 本明ら訳, 2000) の心理学ストレスモデルによる認知的評価では、乱暴な子どもの即時的行動が起こったときに保育士は、有害か無害かの一次的認知評価と対処可能か不能かの二次的認知評価が瞬間的になされ、対処行動がほぼ同時にとられることが明らかとなった。また、経験を積んだ保育士の【感情調整】のサブカテゴリーの中の〈落ち着く〉、〈言葉を飲み込む〉の概念は、一瞬のことであっても、解決先送りコーピングと考えられ、サブカテゴリーの【冷静な行動】は問題解決型の行動であった。さらに、本調査では、自分の陰性感情をありのまま受容するという概念は抽出されなかった。これは、保育士は、子どもに対して陰性感情を持つことを否定的に受け止めているからと考えられた。【感情の調整】は他に、〈受け流す〉、〈考えない〉ということが語られた。これは経験からくる慣れによる回避的行動のようにも考えられるが、受け流し、考えないようにすることで、時間に追われながらその日の課題や日課をこなすことから問題解決型の方法として捉えることもできた。

これらのことから、保育士は、子どもとゆっくり関わることを考えながら瞬間的に反応し、悩み迷い反省しながら、日常生活を重ねていることが明らかになった。また、長い時間その日常生活を重ねていく中で冷静な行動が身に付いていくことが示された。

3. 経験と学びが結びついた《知恵の蓄積》

(1) 【行動が予測できる】ことと【氣力が戻る】こととの関連

保育士は学びと経験により、子どもの発達や個人の特徴を理解できるようになり、技術的な引き出しが増えていった。これを体験することで保育に対する楽しさや、自己肯定感を実感することが語られた。赤田 (2010) は「保育効力感が、“子どもの対応・理解”と“職場・人間関係”に関係する日常苛立ち事を抑制している」と述べている。さらに、本研究ではほとんどの保育士から、子どもの笑顔に癒され、成長に感動し、自らの仕事に対する自己効力感が支えられたことが語られた。保育士の子どもによるストレスは、子どもの笑顔や成長していく姿に癒され、回復していくことが明らかとなった。また、「自分を待っている子どもがいた」、「気づかないうちに子どもに力を与えられていた」などの気づきが保育士としての支えとなったことが語られた。

(2) 援助希求

植田 (2002) は「保育士は、友人や同僚に援助を求める支援利用コーピングを使用することが少ない」と述べている。本研究では、時間的余裕がない中で、他のクラスも余裕がないことが分かっているから頼めない。自分のクラスは自分の責任で何とかしなければならないということが語られた。お互いの状況が分かるだけに気軽に頼むことはできないということであると考えられる。一方、同期の保育士には上司や先輩とは違った気安さや気持ちが分かり合えることから、愚痴や悩みを聞いてもらっていた。また、幼児クラスではクラスへの責任や他のクラスへの配慮から援助を求めにくい、乳児クラスでは柔軟な動きも多く、お互い補い合っていた。つまり本研究では、援助希求について、保育士のそれぞれの役割や場面に応じた気持ちが語られていた。この結果からその園に応じて、保育士の気持ちに即したサポートシステムを考えていくことが必要であることが理解された。

(3) 上司の支え

上司の支えは、サブカテゴリーの【氣力が戻る】に関係していた。保育士が自信を持てずに悩んでいた時に、上司にいろいろなタイプの保育士がいることが必要であると励まされ、そのことがきっかけで仲間に入れられない消極的な子どもの力になろうとした。これは、今のあなたのままで良いという上司の受容的な姿勢である。自信を持っていない時に、そのままが良いと受容されたことで新たな道を見出したのである。保育士は、日ごろ子どもを受容する立場であるが、自分自身が受容された体験により子どもに対してさらに今までとは異なる視点を持つことができたと考えられる。

4. 《経験の統合と自信》

(1) ターニングポイント

経験を統合し、自信を持つ際にはターニングポイントがあることが語られた。例えば、障害を持つ子どもとの出会いでは、その子どもを理解できない苛立ちと自分の非力さからの落ち込み、悩みから勉強するきっかけとなった。発達の問題を持つ子どもへの対応を行うことで、その子の理解だけでなく、様々な子どもの個性の違いにも気づかされたなどであった。高濱 (2001) は「経験年数が長くても、指導の難しい幼児を担当した経験がなければ、自分の対応を振りかえる機会は少ないだろう」と述べている。そこで何が起ころ、何が必要なかは子ども自身が教えてくれる機会となっていた。多様な子どもとの出会いは、保育士の多様で柔軟な姿勢を学ぶことに繋がっていた。

他のターニングポイントとして、自分自身の子どもを持つことで親の視点で保育園の子どもを見ることができ、また親の立場で保育園全体を見ることができるようになったことが語られた。さらに他の職業に就いた経験から子どもたちに何が最も必要なかを考えたことも語られた。このようなことを契機として保育士は、保育園や子どもを俯瞰してみることになり、新たな視点で子どもと繋がることになった。これは、その後の保育士としての成長に影響を与えていた。

(2) 人としての成長

上村ら (2006) は、保育士に対するストレス調査で「保育士は、自己懐疑的なストレスを感じており、生涯発達という視点からすると、保育士という職業を通して自己実現をすることが困難な状況にあるといえる」と述べている。本調査では、経験を重ねてきた保育士が対象であることから、日々成長していく多くの子どもに出会い、子どもから学び、経験と学びが結びつき自分の体験として自分の体に収まることがあげられた。勉強して学び、子どもから学び、同僚から学び、子どもとともに成長していく職業であることが語られた。保育士としての経験と学びと保育以外の人生体験が統合され、保育士としての自信が得られていることが示された。保育士を続けることは、子どもの変化を受け容れる自分自身の変化の過程でもあった。これは自己実現が可能であることを示唆していると考えられた。

(3) 保育士の生涯発達

調査対象の 30 代の 2 名は、20 代の時の仕事の内容や経験により、現在の状況は異なっていた。20 代は大変だったが今が楽しいと語る人と、20 代はもっと意欲的に子どもと遊んでいたのに今は遊べなくなった人もいた。また、自分の子育ての時期でもあり 20 代とは違う自分を楽しんだり、戸惑いを覚えたりしていた。40 代の人には、保育士としての自信を得て、今の自分の生活を守っていた。子育てがひと段落して、パートとして戻ってきた人、継続して仕事をしている人、主任や管理者の立場の人、各々自分らしい生活スタイルを選び、保育園という場で子どもに関わっていた。50 代の人には、若い保育士をサポートする気持ちがあり、出来ないところを補いつつ保育園全体のことを考え、また園を担う次世代の人を育てる役割を担っていた。この年代は、保育士としてのまとめの段階に入っていることから、これまでのことを振り返りつつ、これからの自分を考える時でもある。定年後のことを模索している管理者もいた。保育士の生涯発達は、各年代で課題があり、それを乗り越えていくことで個々のライフスタイルを持ち、保育士としての位置を維持していることが理解された。

5. まとめ

本研究では、保育士の陰性感情に対する対処行動は、《園の日常生活》《経験の積み重ね》《知恵の蓄積》《経験の統合と自信》の категория に大きく分類され、変化の流れを見ることができた。保育士は、日常の様々な場面で陰性感情が喚起され、経験の浅いときは感情的になり即時的対処行動を取っていたが、経験を積み重ねるごとに自分を落ち着かせ感情の調整ができるようになった。さらに、感情の調整が進むにつれ冷静な行動が可能となり、それらを重ねることにより、自己肯定感や仕事に対する喜びや感動が得られ、最終段階で、保育士としての経験を統合し、自信を得るようになった。そしてその経験は、再び日々の子どもとの生活に還元され、さらに経験を重ねるという循環となり、螺旋状に更なる成長へと進むと考えられた。言い換えるとそれは、新年度に新たな子どもや環境と出会い、成長していく子どもや自己に対する気づきを得ていく変化の過程であり、現在もなお、日々子どもに直面する葛藤と気づきを繰り返す保育士の成長の過程として捉えることができた。保育士はこのような陰性感情に対する対

処過程を経て専門性や人間性が向上し、人として成長していくことが明らかにされた。

6. 今後の課題と発展

今後の課題として、保育士の仕事を継続できなかった保育士の子どもに対する陰性感情について調査することが挙げられる。子どもに対する陰性感情の対処行動に違いがあるのか、あるとしたら、その要因を明らかにすることで子どもと保育士の関係がさらに明確になると考えられる。また、今回 20 代の人については、陰性感情に現在直面している可能性を考慮しインタビューを行わなかった。20 代の人にインタビューすることで、現在の保育士の困難さがさらに明らかになることも考えられる。さらに、現在はまだ少数であるが男性保育士についても調査することで、父性的役割の重要性、保育士の社会的位置づけなども明らかになると考える。

本研究では、経験ある保育士に語ってもらうことで、長い時間的経過の中での保育士の専門性と人間性の成長過程を明らかにすることができた。また、子どもが 1 人の人として成長する傍らにいる喜びが多く語られ、それを支える職業であることも改めて示された。これらのことから、保育士としてのあり方を模索している若い人が、本研究で示された結果をモデルとして、子どもと共に成長する保育士としての展望を持つ契機になることを願っている。また、経験者には、今もなお保育士として変化成長している過程にあるものとして、次世代を担う若い保育士をサポートしつつ、共に成長し合う関係を構築していくために本研究を活用してもらうことを期待するものである。

付記

本研究にあたりまして、ご指導頂きました先生方、ご協力頂きました保育士の皆様にこの場をお借りしまして心より御礼申し上げます。

文献

- 赤田太郎 (2010). ストレス評価尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 81, 2, 158-166.
- 藤井義久 (2005). 小学校教師の怒り経験に関する探索的研究 岩手県立大学看護学部紀要 7, 31-41.
- 藤原和美・小坂淳子・今岡洋二・杉原久仁子 (2008). 介護従事者の労働実態とバーンアウト 大阪健康福祉短期大学紀要 7, 125-132.
- 神谷哲司・戸田有一・中坪史典・諏訪きぬ (2011). 保育者における感情労働と職業的キャリア 東北大学大学院教育学研究年報 59, 2, 95-108.
- 柏女霊峰監修 全国保育士会編 (2009). 全国保育士会倫理綱領ガイドブック.
- 加藤司 (2014). 対人ストレスコーピングハンドブック ナカニシヤ出版.
- 木下康仁 (2011). グランデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂.
- 岸井慶子 (2000). 保育の現場から保育の専門性を考える 発達 83, 16-21, ミネルヴァ書房.
- 木曾陽子 (2012). 特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス 大阪府立大学大学院 保育学 保育学研究 50, 2, 26-38.
- Lazarus.S.R. & Folkman.S. (1991). *Stress, Appraisal and Coping*. 本明寛・春木豊・織田正美 (訳) (2000): ストレスの心理学 実務教育出版.

- 松浦利江子 (2010). 患者に対して陰性感情を持つ体験に付随する倫理的葛藤 日本看護管理学会誌 14, 1, 77-84.
- 宮下敏恵(2010). 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討 上越教育大学研究紀要 29, 177-186.
- 森本美佐・林 悠子・東村知子 (2013). 新人保育士の早期離職に関する実態調査 奈良文化女子短期大学紀要 44, 101-109.
- 大宮勇雄 (2013). 保育の質を高める ひとなる書房.
- 斎藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘玲子・宮岡等 (2009). 保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて 新潟青陵大学大学院心理学研究 3, 23-29
- 島田ミチコ (2009). これからの保育士に期待される専門性について 関西学院大学リポジトリ 教育学論究, 1, 41-47.
- 諏訪きぬ (監修) (2012). 保育における感情労働 北大路書房.
- 高濱裕子 (2001). 保育士としての成長プロセス 風間書房.
- 津守 真 (2007). 保育者の地平 ミネルヴァ書房.
- 植田 智 (2002). 保育士におけるバーンアウト—他のヒューマン・サービスと比較しての探索的研究— 鳥取短期大学研究紀要 45, 39-47.
- 上村眞生・七木田敦 (2006). 保育士が抱える保育上のストレスに関する研究 広島大学大学院 教育学研究科紀要 第三部 55, 391-395.